



生活単元学習

1 「生活単元学習」とは

知的障害のある児童生徒に対しては、その学習上の特性から、実態に合わせた指導として「各教科、道徳、特別活動及び自立活動（以下「各教科等」という）を合わせた指導」を行うことができます。生活単元学習は「各教科等を合わせた指導」の一つです。

生活単元学習は、児童生徒が生活上の目標を達成したり課題を解決したりするためにテーマに沿った一連の活動を行い、実際の・総合的に学ぶ学習です。

生活単元学習は、次の①～⑤から成り立つ学習であると言えます。

（①～⑤の主語は全て“児童生徒”です。）

- ① 「これをやろう！」と目的（課題）を持つ
- ② そのために「どうしよう」「何が必要かな」と創意工夫し、準備や練習を行う
- ③ 実際に行動して目的を達成する（課題を解決する）
- ④ 振り返りをする
- ⑤ ①～④を通して必要な力（各教科や自立活動等の）を身に付けることができる

生活単元学習は、各教科等を合わせた指導の形態です。しかし、学習上の一連の活動は、児童生徒にとっては、色々な領域や教科の内容を学習することが目的で行う活動ではありません。児童生徒の取り組む活動は、あくまでも、生活上のテーマに関わる目標を達成するための活動です。児童生徒が、それらに取り組む過程で、結果的に、いろいろな領域や教科の内容を習得するように単元を計画します。

2 「生活単元学習」の特色

- 主体的な学習です。児童生徒が、課題を成就するための一連の活動に、目当てと見通しを持って、主体的に取り組めるようにします。
- 総合的な学習です。児童生徒が、生活上の課題を成就するために必要な、総合的な活動に取り組めるようにします。
- 実際の学習です。児童生徒が、生活上の課題を成就するために必要な、実際の活動に取り組めるようにします。
- 活動的な学習です。児童生徒が、具体的な活動に能動的に取り組めるようにします。
- 共同的な学習です。児童生徒が、課題を成就するための活動に、共通の課題意識を持って、仲間と共同で取り組めるようにします。
- 個別的な学習です。共通の課題意識を持って仲間と共同で取り組めるようにするとともに、児童生徒が一人一人に合った活動に精一杯取り組み、首尾よく課題を達成できるようにします。

3 望ましい「生活単元学習」の条件

- 実際の生活から発展し、児童生徒の興味に基づいたもの
また、興味や関心を喚起し、強めるものであること
- 児童生徒の心身の発達水準等に合ったものであり、個人差の大きい児童生徒の集団にも適合するもの
- 必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るもの
- 児童生徒が目標を持ち、見通しを持って単元活動に積極的に取り組むもの
なお、単元は、児童生徒の目的意識や課題意識を育てる活動をも含んだものであること
- 一人一人の児童生徒が力を発揮し、伸ばすとともに、集団全体が単元活動に共同して取り組むものであること
- 各単元が、その単元で目指している児童生徒の目標あるいは課題達成のために必要にして十分な活動で組織されているもの
一連の活動は、児童生徒の自然な生活として、まとまりがあること
- 豊かな内容を含む単元活動で組織され、さらに、色々な単元を通して、多種多様な経験が児童生徒に与えられるように計画されていること
- 単元の終わりに、児童生徒が大きな満足感・成就感が味わえるもの
- 単元活動によって身に付けた関心・技能・習慣・態度が、学校外の生活にも適用され、単元終了後の生活にも生かされるようなもの

4 単元のタイプ・特徴・具体例

単元のタイプ	単元のテーマや単元展開の特徴	具体例
行事単元	学校行事と関連した活動を単元としてまとめて	運動会、学校祭、学習発表会等
季節単元	季節の生活に関する活動を単元としてまとめて	春の生活、七夕会、お月見会、お正月、等
生活課題単元	偶発的な出来事を契機とした活動を単元としてまとめて	お見舞いに行こう、転校した友達に会いに行こう、等
	社会生活に必要なことから・活動を単元としてまとめて	宿泊学習、校外学習、等
制作・飼育を中心とした単元	制作や飼育活動を単元としてまとめて	遊び道具を作ろう、畑仕事、等
調理を中心とした単元	調理活動を単元としてまとめて	〇〇パーティーをしよう、お弁当を作ろう、等



5 進 め 方 Q & A

○目的（課題）の設定は誰が？

児童生徒によって設定されることが望ましいです。しかし、児童生徒の実態によっては彼らの思いを察して教師が設定することもあります。また、学校・学級の恒例の行事と関連づけて毎年同じように設定することもあります。どのように設定されるにしても、児童生徒の生活に根ざしたものであることが大切です。

○児童生徒が意欲的・主体的に取り組むためには？

目的（課題）に対して、強い意識を持てるようにすることが必要です。目的達成に向けての切実感を持つことで、意欲的、主体的に取り組むことができます。

目的意識を持つことが難しい児童生徒（時間の概念が育っていない、見通しを持つことが難しい等）には、目的（課題解決）に向けた活動を繰り返し積み重ねていくことが有効です。次第に課題意識を持つことができるようし、意欲や主体性を引き出していくようにします。

○単元・本時の流れの考え方は？

児童生徒の生活としての自然な流れとまとまりを持つようにします。児童生徒の思考過程に沿った、必然性のある活動が必然的な流れであるように配列します。また、一連の活動が、例えば準備から片づけまで、というように、目的達成や課題解決に必要な全過程にわたっていることが望ましいと言えます。

○評価は？

まず、児童生徒が活動する姿（願う姿）を具体的に描いて目標を設定します。次に、その目標に対して「このような状況ではこのような表れであった」、というように、指導の手立てと関係づけて評価します。個々に必要な活動と手立てを用意するので、評価の視点、評価事項（何を評価するか）、評価規準も個別に定めることになります。全児童生徒に対して同じ文言の目標が設定されることはあっても、一人一人の児童生徒についての評価規準を決めるに当たっては、評価事項、規準等を個別に具体化することが必要であると言えます。

○重度重複児童生徒には？

遊びを取り入れたり、学校行事を中心とした学習経験の場を通したりして、興味・関心を喚起させながら展開します。展開に当たっては、できるだけ具体的に同じような活動を、少しずつ変化させながら積み重ねていくことが大切です。そのような繰り返しによって、少しずつ意欲的に、主体的に取り組めるようになっていきます。学習効果を上げるためには、一人一人の児童生徒が何に興味を持っているか、どんなことを訴えようとしているか、細やかな実態把握が大切です。その上で、自分の力で活動できるようにしたり、必要な刺激や情報が児童生徒に伝わるようにしたりするための、教材教具の開発、教育環境の整備・充実も大切です。

